

子どもや養育に対する母親の被害的認知と養育行動 における生活環境と自己概念の影響

Effect of Mothers' living environment and self-concept on their victim consciousness toward their children and their parenting roles.

川西千弘・土居淳子

問 題

2019年日本の児童相談所における児童虐待相談・対応件数は193,780件で、5年前の2014年度88,931件の2倍を超える。このように虐待が増加の一途を辿っている現状に対応するため、2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」（通称 児童虐待防止法、2004年第1次改正、2008年第2次改正）が制定・改正され、児童虐待に対する措置とそれを推進する法的整備が次第に担保されるようになった。この中で特に医療・教育・福祉分野に対しては、虐待の早期発見や通告義務が課せられるようになり、虐待リスクアセスメントへの関心が急速に高まり、虐待要因の選定が積極的に行われるようになった。その結果、子どもや養育環境など様々なリスク要因が上げられたが、虐待の根本的解決を図るためには、加害者である親、その中でも特に主たる虐待者として日本では圧倒的な比率を占める母親に着目し、その病理性の解明を目指すことが肝要であると考えられた。

そこで、川西・土居（2013・2015・2017）は、子どもや養育に対する母親の被害的認知に注目し、これを測定する潜在的測度である被害-加害 IAT と顕在的測度である母親養育意識尺度を開発し、この個人差が母親の不適切な養育行動やネガティブ感情および場面想定法の子どもの行動解釈といかに関連するかを明らかにしてきた。しかし、これらの研究では母親の潜在的および顕在的被害的認知が、何に起因するのかが精査できていなかった。そこで本研究では母親の生活環境や自己概念を調査し、それらが母親の子どもや養育への被害的認知、感情および養育行動といかなる関連をもつのかを検討する。

さて、生活環境の中で上述した母親の養育行動や認知・感情に影響を持つものとして、まず母親が獲得できるソーシャル・サポートに注目する。本田（2018）は幼児をもつ母親281人を対象に、夫、友人、実母のソーシャル・サポートと母親の援助要請行動との関連について検討した。その結果、いずれのソーシャル・サポートも各自への援助要請行動を高めるが、友人からのサポートが十分であれば実母への援助要請行動を必要としない可能性が示唆された。また、夫からのサポート不足は母親の育児不安を高め、それが母親の悩みの多さを介して間接的に様々な相手への援助要請行動を促進させることが示された。この他、未就園児を育てる母親105人を対象にソーシャル・サポートと母親の養育行動を検討した田並・米澤（2019）では、情緒的サポートを潤沢に受けている母親は、愛情のある言語や身体的表現を用いて子どもの意図をできる限り充足させようとする応答性が高くなることが示された。さらに、山村

(2005) は幼児を持つ母親 16 人に質問紙と半構造化面接を実施し、生活満足度とソーシャル・サポートの関連性について検討しているが、育児場面で適切に「しかる」など父性が求められる具体的なサポートを夫が行うことで母親の生活満足度が向上し、加えて夫が情緒的サポートをすることで母親の育児不安が低減し、その結果として生活満足度を高めることを明らかにしている。これらのことから、有益なソーシャル・サポートを得ることが母親の心理や子育て行動に良好な影響を与えている可能性が考えられる。そこで、本研究ではソーシャル・サポートの影響について要因として取り上げることにした。また、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「子ども虐待対応の手引き 平成 21 年 3 月 31 日改訂版」表 2-1「虐待に至るおそれのある要因（リスク要因）」のうち養育環境リスク要因にあがっている経済不安についても尋ねることとした。ただし、年間所得など具体的金額を尋ねることは個人のプライバシーに抵触する項目となるため、本研究では家族の生活水準について「高い～低い」の 5 件法で回答を求め、自分の生活水準を主観的判断として捉えることにした。この他、飯田・園田（2017）は、キャリア選択が母親の育児不安に影響することを指摘しており、この点についても検討を加える。

次に、母親の養育行動や認知・感情に影響を持つものとして、母親の自尊感情や自己受容という自己概念についても取り上げることにした。小林・渡辺(2000)は、乳幼児を持つ母親 153 人を対象に自己受容感と自己拒否感を測定し、育児や子どもへの印象との関連を検討した結果、自己受容感と自己拒否感が共に低いタイプⅠは子どもとの情緒的結びつきが不安定になりやすいこと、自己受容感が低く自己拒否感が高いタイプⅡはもともと子どもが好きでない傾向が高いこと、自己受容感が高く自己拒否感が低いタイプⅢは子どもとの関係が安定し育児を楽しんでいること、自己受容感と自己拒否感が共に高いタイプⅣは育児の楽しさは高いもののそれと同時に育児の煩わしさも高いことが示された。また、飯田ら（2017）は 3～6 歳の認定こども園児をもつ母親 268 人を対象に、自尊感情と育児不安の関連についてキャリア選択も視野に入れて検討した。その結果、フルタイム就業では自尊感情が低いほど育児不安が高くなること、専業主婦でも同様の傾向が見られたが自尊感情が低い母親は育児不安のうち特に育児への否定感が高いことが示された。以上のことから、自己を如何に肯定的あるいは受容的に捉えているかという自己概念の在り方が子どもや養育に影響を与えていることがうかがえるため、本研究でもこのような自己概念について取り上げることにする。ただし、本稿では自己受容や自尊感情など自己全般への意識よりも自己のどの側面が子どもや養育行動に影響するのかをより鮮明に捉えるため、「人間として」「女性として」「母親として」など様々な自己の側面から自分をどのように捉えているのかという指標を用い、自己の如何なる側面への評価が養育意識や行動などと関連するのかを明らかにする。

以上のことから、母親を取りまく「ソーシャル・サポート」や「主観的生活水準」などの生活環境や、「人間」「女性」「母親」など多様な自己役割に関する自己概念が、母親の子どもや養育に対する潜在的および顕在的被害的認知、感情および養育行動にどのように影響するのかを具体的に検討することにした。

方 法

参加者

少なくとも 1 人は乳幼児を養育中の母親 163 人を対象とした。母親の年齢構成は、20～24 才 1 人（0.6%）、25～29

才6人(3.7%)、30~34才40人(24.5%)、35~39才72人(44.2%)、40~44才41人(25.2%)、45才以上2人(1.2%)であった。また、子どもの人数は1人が30人(18.4%)、2人が95人(58.3%)、3人が28人(17.2%)であった。家族構成は、「夫婦と子ども」143人(87.7%)、「母親と子ども」3人(1.8%)、「三世同居」15人(9.2%)であった。

調査内容

1.質問紙の構成

以下の4つの尺度を用いて実施した。

(1)母親の養育意識尺度 被害的認知の顕在的測度として、母親の子どもに対する「被害-加害」認知に注目し、被害的観点から「自分の人生への侵食感」「被害的意識から発生する敵意帰属」「自分の未熟さ露呈への嫌悪」「自分の短所を体現する脅迫感」を、加害的観点から「親としての権威的態度」を、そして尺度としてのバランスを考慮してポジティブな養育意識に関するものも含めた母親養育意識尺度を構成した。具体的な項目は、池田(1999)、大日向(2002)および原田(2008)を参照に独自に作成したもの37項目以外に、大日向(1988)の母親意識尺度(否定的側面)、清水(2001)の育児ストレス尺度、中谷ら(2006)の母親の認知尺度、湯舟(2007)の母親意識質問紙、西澤(2010)の虐待心性評価尺度を参考に、本研究の目的に合わせて抜粋あるいは加筆・修正した項目を付加し、全体で62項目からなる母親養育意識尺度を構成した。なお「各項目について、あなたご自身の考えや思いにあてはまる(最も近い)もの1つに○をつけてください」という指示により、「あてはまる5」から「あてはまらない1」の5段階で回答を求めた。

(2)母親の感情尺度 母親の現在の感情や精神状態を明らかにするため、寺崎・岸本・古賀(1992)の多面的感情尺度の「抑鬱・不安」「倦怠」「非活動的快」および「活動的快」因子から5項目、これに独自に「癒される」や「こんなはずではなかった」など子育て中の母親の感情を表すと考えられる18項目を追加して23項目からなる尺度を構成した。「最近の生活の中で、あなたが感じるお気持ちについてお伺いします。」という指示により、上記同様の5件法により回答を求めた。

(3)養育行動尺度 母親の子どもに対する育児行動の内容と頻度を明らかにするため、ネガティブな養育行動として、中嶋(2004)の子どもへの虐待相当行為および中谷ら(2006)の虐待傾向尺度から「暴力的行為」「遺棄的行為(ネグレクト)」「心理的虐待」に関する14項目、これに戸田(2000)の母親の養育態度尺度のうち過保護や甘やかしを参照し、「子どものしたいようにさせる」など4項目を独自に追加した。また、尺度としてのバランスを考慮して「抱っこする」などのポジティブな養育行動を付加し、全部で27項目の尺度を作成した。「普段の子育てを思い出してください。あなたは、ご自分の子どもさんに対して以下のような行為をどの程度しますか？(したことがありますか?)」という指示により、「よくある5」「時々ある4」「たまにある3」「1・2度ある2」「全くない1」の5段階で回答を求めた。

(4)母親の生活環境・自己概念尺度 以下の①~⑥の項目について尋ねた。①母親の年齢、②子どもの数(子どもの性別・構成)、③家族構成(以下の4項目から1つ選択方式・夫婦と子ども・あなたと子ども・三世家族(夫婦・子ども・おじいさんやおばあさんが同居)・その他)、④生活水準(プライバシー保護のため以下の5項目から1つ選択方式・高い・中の上・中・中の下・低い)「低い」ほど数値が高くなるように

数値化した。④職歴（以下の5項目から1つ選択方式 ・これまで、正社員（正職員・フルタイム派遣職員）などで仕事したことはない ・結婚するまで正社員（正職員・フルタイム派遣職員）などで仕事していた ・結婚して子どもが生まれるまで正社員（正職員・フルタイム派遣職員）などで仕事していた ・現在も正社員（正職員・フルタイム派遣職員）として継続勤務している ・その他） ⑤自己概念の測定（「あなたが、今の自分を自己採点したらどの程度だともいますか？「人間として・・・」「女性として・・・」「母親として・・・」の3側面について、100点満点（0~100点の間）で採点をお願いします。」という教示のもと、人間として・女として・母親として、各質問に0~100点で自己評定を求めた）、⑥子育てサポート環境（サポートしてくれる人数を記載してもらったうえで「相談したり・手伝ってもらえる人すべてに○をつけて下さい」という教示のもと【・夫 ・友人 ・自分の親 ・自分の兄弟姉妹 ・夫の親 ・夫の兄弟姉妹 ・その他】について尋ねた。

2. IATの作成

被害的認知の潜在的測度として被害-加害 IAT を作成した。これは、Greenwald, McGhee, & Schwartz(1998)に準じ7ブロックから構成し、対象概念は「自分」「子ども」、属性概念は「被害」「加害」とした。「自分」に関する刺激語は「自身」「私」など、「子ども」に関する刺激語は「わが子」「幼児」など、また属性概念に対する刺激語は養育場を想定した予備調査に基づき、「被害」では「侵される」「虐げられる」など、「加害」では「攻撃する」「いたぶる」など、各々5語を用いた。参加者には、コンピュータ画面中央に1つずつ表示される刺激語を、右ないし左のカテゴリーへと出来るだけ早く分類するように指示した。画面上部の左右には分類すべきカテゴリーを提示した。第1ブロック（20試行）は左に「自分」右に「子ども」が、第2ブロック（20試行）は左に「被害」右に「加害」が、第3ブロック（20練習試行）左に「自分」と「被害」、右に「子ども」と「加害」を対提示、）、第4ブロック（40本試行）第3と同様のデザイン、第5ブロック（20試行）は第1ブロックと同様だが、カテゴリー表示を逆転、第6ブロック（20練習試行）左に「子ども」と「加害」、右に「自分」と「被害」、最終の第7ブロック（40本試行）、第6と同様のデザインであった。本調査では、IATと後述する顕在的測度である質問紙のデータを接合するために参加者に4~5桁の任意な数字の記入をもとめたが、被害-加害 IAT のカウンターバランスをとるために、その数値が偶数の参加者には上述した順番で、奇数の参加者には第1、第2ブロックの後、第6、第7、第5、第3、第4の順で IAT を実施した。刺激語の提示間隔は250ms で、刺激語の提示からキーを押すまでの時間を反応時間として測定した。これらの操作には、Millisecond software 社の Inquisit 3.0 を用いた。

手続き

認定子ども園（幼稚園）を通じて本調査の主旨などを広報し参加希望者を募った。調査は、被害-加害 IAT、質問紙という順で、いずれも個別に無記名で調査を実施した。

倫理的配慮

調査の際、事前説明として「研究目的」「プライバシーの保護」「参加を撤回、途中で辞退するおよび回答を拒否する権利があること」「研究結果公表時の個人情報保護」「データの管理責任を研究者が負うこと」などを文章と口頭で通知し、同意を得たもののみを参加者とした。ただし、事前説明を具体的にしすぎることは、調査目的の露見や反応歪曲を招くため、詳細は事後説明（ディブリーフィング）にて行い、最後に同意書に署名を得た。また、参加者へのフィードバックとして、研究成果を平易に記述した研究報告書を作成し、希望に応じて配布した。なお、調査の

実施に当たり、京都光華女子大学研究倫理委員会に詳細な研究目的と方法を提出して審査を受け、調査の妥当性を担保した。

結 果

尺度の構成

川西ら（2013）で報告した因子分析結果に基づき、母親養育意識尺度および母親感情尺度の下位尺度を構成した。川西ら（2013）では、本研究の参加者 163 人に付加して、別の研究目的で乳幼児を養育中の母親 95 人を対象に上記 2 尺度と後述の養育行動尺度を共に用いたため合計 258 人の母親データが得られており、これに基づく因子分析結果のほうにより安定し妥当性が高いと考えられる。そこで、本研究ではその因子分析結果に準じて下位尺度を構成し、信頼性を確認するために各下位尺度で本研究参加者のデータをもとに α 係数を算出した。なお、養育行動尺度は中嶋（2004）他を参考に下位尺度を構成し、 α 係数を算出して信頼性を検討した。母親の生活環境・自己概念尺度は、項目ごとに分析に用いた（平均・SD は表 1 参照）。IAT データは、Greenwald, Nosek & Banaji（2003）に準じて処理し、D スコアが低いほど「自分」と「被害」の潜在的連合が強く、子どもや養育に対して潜在的被害観を抱えていることを示すよう数値化した。なお、D スコアの平均は 0.39、SD は 0.28 であった。

表1. 生活環境・自己意識尺度の平均とSD

	子ども人数	生活水準	サポート人数	人間自己意識	女性自己意識	母親自己意識
平均	2.00	2.96	5.57	66.33	57.96	66.02
SD	0.62	0.76	4.19	12.57	14.89	14.22

1. 母親養育意識尺度

下位尺度名、および（項目数）と α 係数は以下のとおりである。“子どもがいてくれるので、人生が充実したと思う”など「成長充実」（7項目） $\alpha=.790$ ；“子どものために、仕事や趣味など自分のしたいことができない”など「アイデンティティ喪失感」（6項目） $\alpha=.704$ ；“子どもにバカにされているような気がする”など「被害的解釈」（8項目） $\alpha=.821$ ；“子どもをみていると自分の悪い部分が映し出されているように思う”など「短所への脅迫」（4項目） $\alpha=.691$ ；“子どもは親を喜ばす存在であるべきだと思う”など「過剰期待」（4項目） $\alpha=.592$ 。前者 3 下位尺度は十分な内的整合性が確認されたので、これで下位尺度を構成した。しかし、後者 2 つの α 係数は十分とは言えなかったが、これ以上項目整理をしても α 係数が改善せず平均値の安定性を考慮し、これらの項目内容で下位尺度を構成した。

表2. 母親養育意識下位尺度の平均とSD

	成長充実	被害的解釈	アイデンティティの喪失	短所への脅迫	過剰期待
平均	4.39	1.36	2.42	3.12	1.84
SD	0.48	0.53	0.77	0.88	0.69

2. 母親感情尺度

下位尺度名、および（項目数）と α 係数は以下のとおりである。“うれしい”など「癒され感」（6項目） $\alpha=.765$ ；“あせる”など「焦燥感」（5項目） $\alpha=.761$ ；“むなしい”など「虚無感」（4項目） $\alpha=.774$ ；“やりなおしたい”など「後悔」（3項目） $\alpha=.745$ 。いずれの下位尺度も、十分な内的整合性が確認されたので、これらで尺度構成を行った。

表3. 母親感情下位尺度の平均とSD

	癒され感	焦燥感	虚無感	後悔
平均	3.99	2.88	1.69	1.86
SD	0.58	0.93	0.71	0.92

3. 養育行動尺度

下位尺度名、および（項目数）と α 係数は以下のとおりである。“抱っこする”など「愛情適切」（9項目） $\alpha=.760$ ；“たたく”など「身体的暴力」（4項目） $\alpha=.585$ ；“放っておく”など「ネグレクト」（3項目） $\alpha=.522$ ；“傷つくようなことをいう”など「心理的嫌がらせ」（4項目） $\alpha=.653$ ，“機嫌をとる”など「甘やかし」（4項目） $\alpha=.514$ 。「愛情適切」以外は、どの下位尺度も内的整合性が十分ではないが、これ以上項目を整理しても α 係数が改善せず、平均値の安定性を考慮し、これらの項目内容で下位尺度を構成した。

表4. 養育行動下位尺度の平均とSD

	愛情適切	身体的暴力	ネグレクト	心理的嫌がらせ	甘やかし
平均	4.53	1.66	2.38	2.72	3.20
SD	0.43	0.55	0.83	0.73	0.60

各尺度における生活環境と自己概念の影響

この項では、本研究の主目的により生活環境や自己概念の各項目が関与したもののみ報告することにする。

1. 被害 - 加害 IAT における影響

IAT については前述したとおり D スコア を算出して従属変数とし、子どもの数、生活水準、サポート人数を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行い、有意であった独立変数のみで再度分析した。その結果、「サポート人数の多さ」から「D スコア」に対する標準偏回帰係数が有意であった（ $-.169, p < .01, R^2 = .029$ ）。

なお、自己概念（人間として、女性として、母親として）に関しては、いずれも IAT との関係は見出されなかった。

2. 母親養育意識尺度における影響

(1) 母親養育意識尺度と生活環境の因果関係 母親養育意識の各下位尺度（成長充実・アイデンティティ喪失感・被害的解釈・短所への脅迫）を従属変数、子どもの数、生活水準、サポート人数を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行い、有意であった独立変数のみで再度分析した。その結果、「生活水準の低さ」から「短所への脅迫」に対する標準偏回帰係数が有意であった（.255、 $p < .01$ 、 $R^2 = .065$ ）。

(2) 母親養育意識尺度と自己概念との関連性 母親養育意識の各下位尺度と自己概念との関連性について相関係数（ピアソンの相関係数）を算出したところ、有意なものは以下の関連性であった。まず、「人間としての自己採点」と「短所への脅迫」間で負の相関が（ $r = -.289$ 、 $p < .01$ ）、「女性としての自己採点」と「アイデンティティ喪失感」・「短所への脅迫」それぞれの間でも負の相関（順に、 $r = -.158$ 、 $p < .05$ ； $r = -.272$ 、 $p < .01$ ）が確認された。さらに、「母親としての自己採点」と「短所への脅迫」間では負の（ $r = -.318$ 、 $p < .01$ ）「成長充実」「過剰期待」では正の相関（順に、 $r = .190$ ； $r = .195$ 、いずれも $p < .05$ ）が確認された。

3. 母親の感情尺度における影響

(1) 母親の感情尺度と生活環境の因果関係 母親の感情尺度の各下位尺度（癒され感・焦燥感・虚無感・後悔）を従属変数、子どもの数、生活水準、サポート人数を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行い、有意であった独立変数のみで再度分析した。その結果、「子ども人数」から「虚無感」に対する標準偏回帰係数が有意であった（ $-.256$ 、 $p < .01$ 、 $R^2 = .066$ ）

また、各下位尺度を従属変数、職歴を独立変数として1要因分散分析を行った。その結果、焦燥感のみで有意（ $F(3, 151) = 3.75$ 、 $p < .05$ ）となり、多重比較の結果5%水準で、「結婚・出産後仕事を辞めた人＝子どもが生まれるまで仕事をしてきた」の方が「仕事をしたことがない」人より焦燥感が低いことが示された。

表5. 職務ごとの焦燥感の平均とSD

	1	2	3	4
平均	3.56	2.84	2.70	3.63
SD	0.58	0.91	0.99	0.57

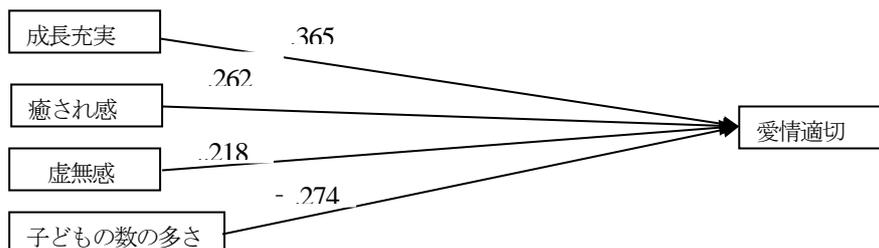
1: 仕事をしたことがない(9人)、2: 結婚するまで仕事をしてきた(80人)、
3: 子どもが生まれるまで仕事をしてきた(60人)、4: 現在も仕事をしている(6人)

(2) 母親の感情尺度と自己概念との関連性 自己採点との関連性では、「人間としての自己採点」と「癒され感」の間で正の相関が確認された（ $r = .218$ 、 $p < .01$ ）。「女性としての自己採点」と「癒され感」とは正の、「焦燥感」「虚無感」の間には負の相関が示された（順に、 $r = .237$ ； $r = -.208$ ； $r = -.220$ 、いずれも $p < .01$ ）。さらに、「母親としての自己採点」と「癒され感」とは正の、「虚無感」との間には負の相関がみられた（順に、 $r = .235$ 、 $p < .01$ ； $r = -.178$ 、 $p < .01$ ）。

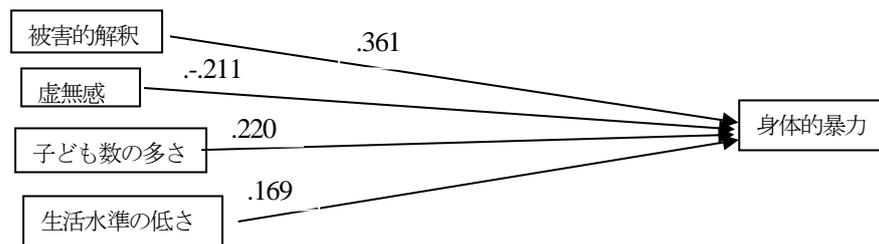
3. 養育尺度における影響

(1) 養育尺度と生活環境の因果関係 各養育行動（身体的暴力、ネグレクト、心理的嫌がらせ、甘やかし）を従属変数、IAT、母親養育意識の下位尺度、感情の下位尺度および子どもの数、生活水準、サポート人数を独立変数として重回帰分析（強制投入法）を行い、有意であった独立変数のみで再度分析した。養育行動は行動レベルでの尺度なので、母親養育意識尺と感情尺度など認知と感情にも起因があると考え、同時に独立変数として投入した。ただし、本研究の主目的から生活環境の変数が関与したもののみ報告する。

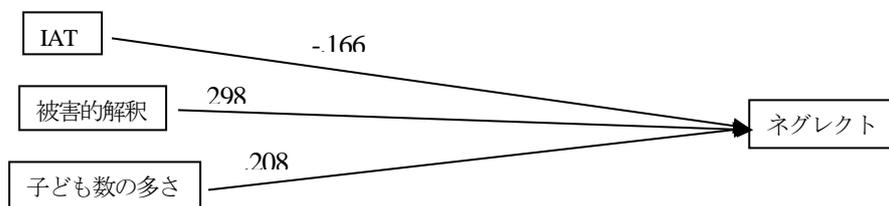
まず、「子ども数の多さ」から「愛情適切」に対する標準偏回帰係数が有意であった（ $-.274, p<.05, R^2=.314$ ）。



次に、「子ども人数」「生活水準の低さ」から「身体的暴力」に対する標準偏回帰係数が有意であった（順に.220; .169,共に $p<.05, R^2=.203$ ）。



また、「子ども人数」から「ネグレクト」に対する標準偏回帰係数が有意であった（ $.208, p<.05, R^2=.154$ ）。子どもの数が多かったり、生活水準が低いという認識を持つほど不適切な養育行動が促進されることが示された。



(2) 養育行動尺度と自己概念との関連性 自己採点との関連性では、「女性としての自己採点」と「愛情適切」の間には負の相関の傾向が示された（ $r=-.138, p<.1$ ）。さらに、「母親としての自己採点」と「身体的暴力」との

間にも負の相関の傾向がみられた ($r=-.145, p<.1$)。

考 察

本研究の目的は、乳幼児を養育中の母親を取りまく「ソーシャル・サポート」などの生活環境や自己概念が、母親の子どもや養育に対する潜在的および顕在的被害的認知、感情および養育行動に如何なる影響を及ぼすのかを明らかにすることであった。

まず、生活環境のうち「ソーシャル・サポート」との関連では、潜在的指標である IAT でサポート人数の少なさが潜在的加害、つまり非意識的に子どもや子育てにおいて自分が“攻撃している”という感覚に結びつくことが示された。周囲に助けてくれる人が少ないことが、精神的、物理的、あるいは時間的に母親を追い詰め、それが子どもや養育行動において非意識的に虐待しているという感覚に結びつくのかもしれない。本田(2018)では、夫のサポートの無さが母親の育児不安の高さを誘引することが示された。また、田並ら(2019)では周囲からサポートの無い人は子どもの意志とは関係なく母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行為である「統制」という比較的閉じられた子育てを行うことを報告している。つまり、これらの研究は周囲の人に援助してもらえない母親では、頑なに子どもを支配するなど不適切な養育行動が増加したり、育児への不安が高くなる事を示しており、本結果はこれらの結果とも整合性があった。ただし、本田や田並らの研究ではいずれの変数も意識レベルのもので理解しやすいが、本研究で示されたサポート人数の少なさという意識レベルの変数が、潜在的に子どもを“攻撃している”という非意識的感覚へ如何なるプロセスで結びつくのかについては更なる検討が必要である。さらに、本研究ではサポート人数を尋ねただけで、「どのような場面で」「誰に」「どの程度の」サポートを必要としたかを具体的に確認していない。これらについても今後精査していく必要がある。

また、生活環境のうち「生活水準」の影響については、母親養育意識のうち「短所への脅迫」と養育行動のうち「身体的暴力」との関係が明らかになった。前者については主観的に生活水準が低いと認識せざるを得ない状況が自分の短所を子どもに投影する認知を生じさせることが示され、経済的な苦しさが生活や母親の心理的余裕を奪い、いやでも自分の欠点や短所を認識させることに短絡的につながってしまう、しかしそれを自覚したり、自責することが辛く、子どもに投影してしまうのかもしれない。後者は、経済的な生活の苦しさが身体的暴力を生み出すことを示しており、主観的に自らの生活水準が低いと考える母親は生活や気持ちにゆとりやうおいを感じられず、フラストレーションからそのはけ口として子どもへの力の行使が増えるのかもしれない。山村(2005)は、母親にとって生活の中で経済的余裕のなさが生活満足度や育児不安を助長する可能性を指摘しており、本結果もこれと整合的な結果といえる。

さらに生活環境のうち「子ども人数」に関しては、母親の感情のうち「虚無感」との関係が示され、子どもの人数が多いことが虚無感を払拭することにつながる事が明らかになった。これは、子どもの人数が多いことで子育てにかかる時間や相互作用が増えることから、子育てに関して虚しいなどの気持ちを抱かなくてもすむのかもしれない。また、母親の養育行動への影響については「子どもの数の多さ」と「愛情適切行動」とは負の、「身体的暴力」「ネグレクト」との間には正の関連が示され、子どもの人数の多さが愛情適切行動の阻害要因になると同時に身体的暴力やネグレクトなどの不適切養育行動の促進要因となる可能性が指摘された。田並ら(2019)では、子どもの数が2人

のほうが1人よりこどもの意図・欲求に気づき、愛情のある言語や身体的表現をもちいて子どもの意図をできる限り充足させようとする「応答性」が低くなる事が示されており、これらを勘案すると子ども的人数が多いことによって母親への子育てに関する時間と負担が多くなり母親から余裕を失わせ疲弊させ、そのために、各子どもへの対応が不十分になり適切かつ細やかに愛情表現する気持ちを萎えさせ、不適切な養育行動の頻度をあげてしまうのかもしれない。

この他、「職歴」では母親の感情のうち「焦燥感」との関連性が明らかになり、「結婚・出産後仕事を辞めた人＝子どもが生まれるまで仕事をしてきた人」の方が「仕事をしたことがない」人より母親の焦燥感が低いことが示され、仕事をしてきた人のほうが仕事をしたことがない人より焦りが少ないことが明らかになった。これは、仕事をしてきた人は、仕事のおもしろさも味わただろうが、同時に大変さも実感としてわかっており、子育てのために仕事から引いても仕事への未練がないのかもしれない。それに対して、仕事をしたことがない人は仕事への経験知がないために社会での活躍ということへのあこがれを持ち続けていたり、逆に社会から取り残された感があり、それが焦りにつながっているのではないかと考えられる。飯田ら(2017)では、専業主婦の母親は有職の母親より育児不安が高いことが示されており、同時に「現在は専業主婦であるが将来は仕事をしたい」という人が74.3%で将来も専業主婦を続けるという13.3%を大いに上回る。これらのことを考えると、仕事をしたことがない母親は、上述した社会からの取り残され感と将来仕事に就くための準備不足などの気持ちがあり、それが焦りにつながっているのかもしれない。

次に自己概念との関連で、まず「人間」「女性」「母親」などいずれの自己評価も高い人ほど、母親養育意識のうち「短所への脅迫」得点が低く、子どもへ自分の短所を投影しないことが明らかになった。これは様々な側面で自己評価が高いことは、そもそも自分の欠点や短所を認識しない・しなくてもいい心理状況にあるために、子どもへそのような投影をする必要がないのかもしれない。また、母親の感情のうち「癒され感」の得点も高くなり、「人間」「女性」「母親」いずれの自己評価も高いことは、自分の現在の生活が充実し順当で、日々の子どもの生活の中で癒されるという感覚に恵まれているのかもしれない。小林ら(2000)や飯田ら(2017)でも自尊感情や自己受容が高いほど育児不安が低くなることが示されており、本結果もこれらと整合的な結果となっている。ただし、本研究では自己評価が高いことが子育てへの意識や母親の感情にいい影響を与えているのか？あるいは逆に子育てが充実しているから自尊感情が高くなるのか？などの因果関係の方向性については明らかではないため、この点については今後の検討が必要である。

また、「女性」としての自己評価が高いほど、母親養育意識のうち「アイデンティティーの喪失感」が少ないこと、母親の感情では「焦燥感」や「虚無感」が低いことも示された。これは、女性性に自信がある人ほど自分の女性の部分を大切に考えているために自らのアイデンティティーを母親になっても持ち続けやすく、この女性アイデンティティーをしっかりとつことが、生活や生き方に焦りや虚しさを感じさせにくいかもしれない。加えて、「人間」と「母親」の相関が非常に高い($r=.733, p<.001$)のに対し、「女性」と「人間」および「女性」と「母親」の相関はそこまで高くはなかった(順に、 $r=.562, ; r=.556$, いずれも $p<.001$)。これらのことを考えると、女性への自信は母親や子育てとは異なる自己の側面への自信であり、そのように自己複雑性が高い状況ではストレス耐性が高くなる(Linville, 1987)ことから、焦燥感や虚無感などのネガティブな感情を持ちにくいかもしれない。ただし、「女性」としての自己評価の高さが「愛情適切」行動を抑制する傾向が示された。これは、母親より女性の部分を優先している人はど

うしても母親になることを強いる子どもへの関心や関わりが希薄になってしまうのかもしれない。

さらに、「母親」としての自己評価が高いほど「成長充実」「過剰期待」共に得点が高く、子どもの養育を通して自らの成長を実感しているが、子どもへの期待も肥大化することが示された。また、母親感情のうち「虚無感」との関連も示され、「母親」としての自己評価が高いほど虚しさを感じにくいことも明らかになった。小林ら(2000)の研究では母親としての自己受容感が高く自己拒否感が低いタイプⅢは、子どもとの関係が安定し育児を楽しんでいることを報告しているが、本研究もこれと整合的な結果を得た。日本は相互依存的自己観をもちやすい(Markus, . & Kitayama, ,1991)と考えられるが、母親としての自信は自己と子どもとの自己観の融合の強さを反映しているのかもしれない。そのために母親として適切な相互作用を行い、子どもとの関わりで癒しや充実感を感じるが、自分と子どものアイデンティティーは個として分離しにくく子どもに自分を重ね合わせるため、子どもへの期待が大きくなるのかもしれない。加えて、「母親」として自己評価が高い人ほど「身体的暴力」の頻度が低くなる傾向が示された。これは、母親としての自信は子どもとの相互作用の上手さや楽しさから生起しており、身体的暴力など力の行使をもって子どもを統制したり、そのかわりを歪めるようなことをする必要は少ないのかもしれない。

本研究は、母親の子どもや子育てに関わる被害的認知・感情や養育行動に母親を取りまく生活環境や自己概念がどのようにかわるのかを明らかにした。これらにより、母親のいかなる生活環境を整えることが虐待リスクを低減することにつながるのかについて認識面(顕在的および潜在的)と行動面共に明らかにすることができた。ただし、本研究は、人数が163人と限定的であったため色々細分化した検討はできなかつたし、例えばソーシャル・サポートに関しては対象・頻度・内容の未検討など変数の取り方として詳細さに欠けるところもあった。しかし、直接的に虐待リスクを下げる要因について考慮すべき点を指摘し、「人間として」「女性として」「母親として」など如何なる自己の側面に重きを置くかによって子育てへの意識と行動が異なってくることも明らかになり、母親の生活環境・生き方への自信と子育てとの関連性の一端を明らかにできたことについては意義があったと考えられる。

引用文献

- Greenwald, A. G., Nosek, B. A. & Banaji, M. R. Understanding and Using the Implicit Association Test: I. An Improved Scoring Algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2003, Vol. 85, No. 2, 197–216.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. 1998 Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480
- 原田正文 2006 『子育ての変貌と次世代育成支援 兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』 名古屋大学出版会
- 本田 真大 2018 育児不安に焦点を当てた母親の子育ての悩みの援助要請行動に影響を与える要因の検討 学校臨床心理学研究：北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要 15 11-21
- 飯田麻衣子・園田菜摘 2017 育児期の母親の育児不安を規定する要因 ～自尊感情、キャリア選択の希望との関連～ 教育デザイン研究 8 157-164

- 池田由子 1999 児童虐待 ゆがんだ親子関係 中公新書
- 川西千弘・土居淳子 2013 母親の被害的認知による虐待メカニズムの解明～被害的認知尺度の開発 科研費成果報告書
- 川西千弘・土居淳子 2015 母親の被害意識・養育行動における生活スタイルの影響 日本心理学会第 79 回大会発表論文集
- 川西千弘・土居淳子 2017 母親の潜在的・顕在的被害感と不適切な養育行動の関連～母親養育意識尺度と被害-加害 IAT の組み合わせによる分析～ 日本心理学会第 81 回大会発表論文集
- 小林真・渡辺亜矢 2000 母親であることについての女性の自己概念 ～自己受容感と自己拒否感に関する調査～ 富山大学教育学部研究論集 3 63-67
- Linville,P.W.,(1987) Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related depression and illness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52,663-676.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 中谷 奈美子 ・ 中谷 素之 2006 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究年 17 巻 2 号 p. 148-158
- 西澤 哲 2010 「虐待してしまう親の心」 西澤 哲 『子ども虐待 なぜ親が子を？傷ついた心をどう癒すのか？』第 2 章 講談社現代新書 p66
- 大日向雅美 2002 『母性愛神話とのたたかひ』 (株)草土文化
- 清水 嘉子 2001 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究 *ストレス科学* 16(3), 176-186, 2001
- 田並 幸恵・米澤 好史 2019 未就園児を育てる母親の養育態度とソーシャルサポート・自己評価の関係：愛着形成の視点から *和歌山大学教育学部紀要*. 69 27-34
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 多面的感情状態尺度の作成 Construction of a multiple mood scale. *心理学研究* 62(6), 350-356, 1992
- 戸田須恵子 母親の育児ストレスと幼児の気質及び養育態度との関係について *北海道教育大学紀要 教育科学編* 50(2), 35-45, 2000-02
- 湯舟貞子 2007 日本人女性の持つ母性意識 園田学園女子大学論文集 41, 51-62, -01
- 付記 本研究は科学研究費補助金（基盤研究(c)課題番号 22531076）を受けて実施した。